

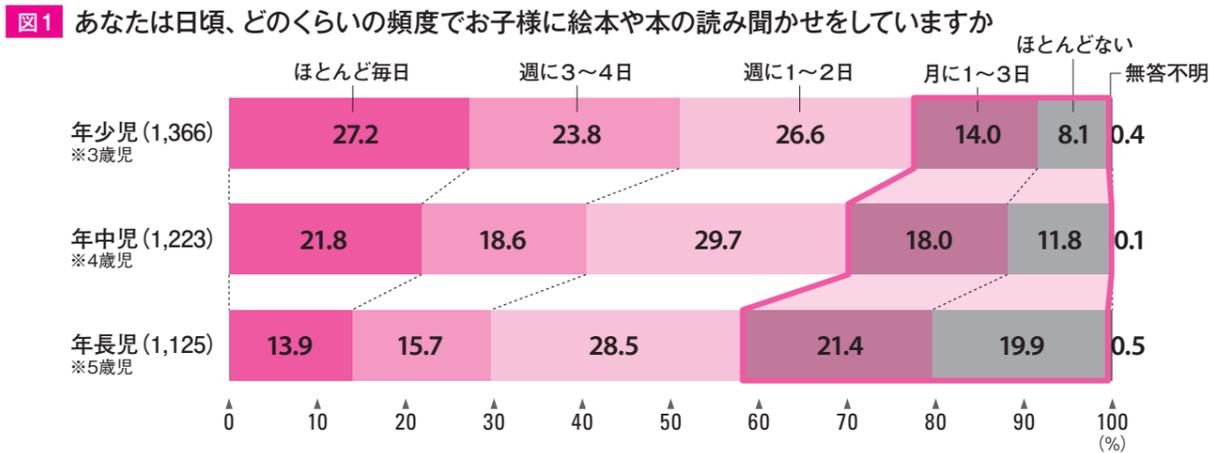
卒園前後の子どもに対する保護者の関わりと意識

ベネッセ次世代育成研究所は、2012年1~2月、3歳児~小学1年生の子どもをもつ母親5,016名に「子どもの学びの芽生えと、母親の関わり・小学校に向けての意識」などについて調査を行いました。この調査結果から、年長児の保護者が子どもの入学に向けて知りたいことや、入学までに身につけておけばよかったと考えていることなどを紹介します。園で年長児の家庭への支援を考える材料のひとつとして、また、年長児の保護者への発信にもぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください（例：ベネッセ次世代育成研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」(2012)）。

年長児の家庭の約4割は、読み聞かせが「月1~3日」以下

Q あなたは日頃、どれくらいの頻度でお子さまに絵本や本の読み聞かせをしていますか。



★年少児~年長児をもつ母親に絵本や本の読み聞かせの頻度を聞きました。年長児においてもっとも多かったのが「週1~2日」でした。年中児、年長児と成長するにつれ、減少していくのが「ほとんど毎日」「週に3~4日」読むという回答、逆に

増加しているのが「月に1~3日」「ほとんどない」という結果でした。子どもが成長するにつれ、絵本や本の読み聞かせの頻度が大きく変化していることがわかりました。

研究員解説

この調査の別の項目では、年長児になるほど子どもがひとりで絵本や本を読んだり見たりする頻度も減ることがわかっています。また、1日の中でテレビゲームや携帯ゲームで遊ぶ時間が増えるなど、成長につれて時間の過ごし

方が多様化する様子もうかがえます。さらに年長児では、図書館で本を選ぶのは「母親」よりも「子ども自身」という割合が増えます。好きなジャンルができて、主体的に本を選ぶ時期なのかもしれません。

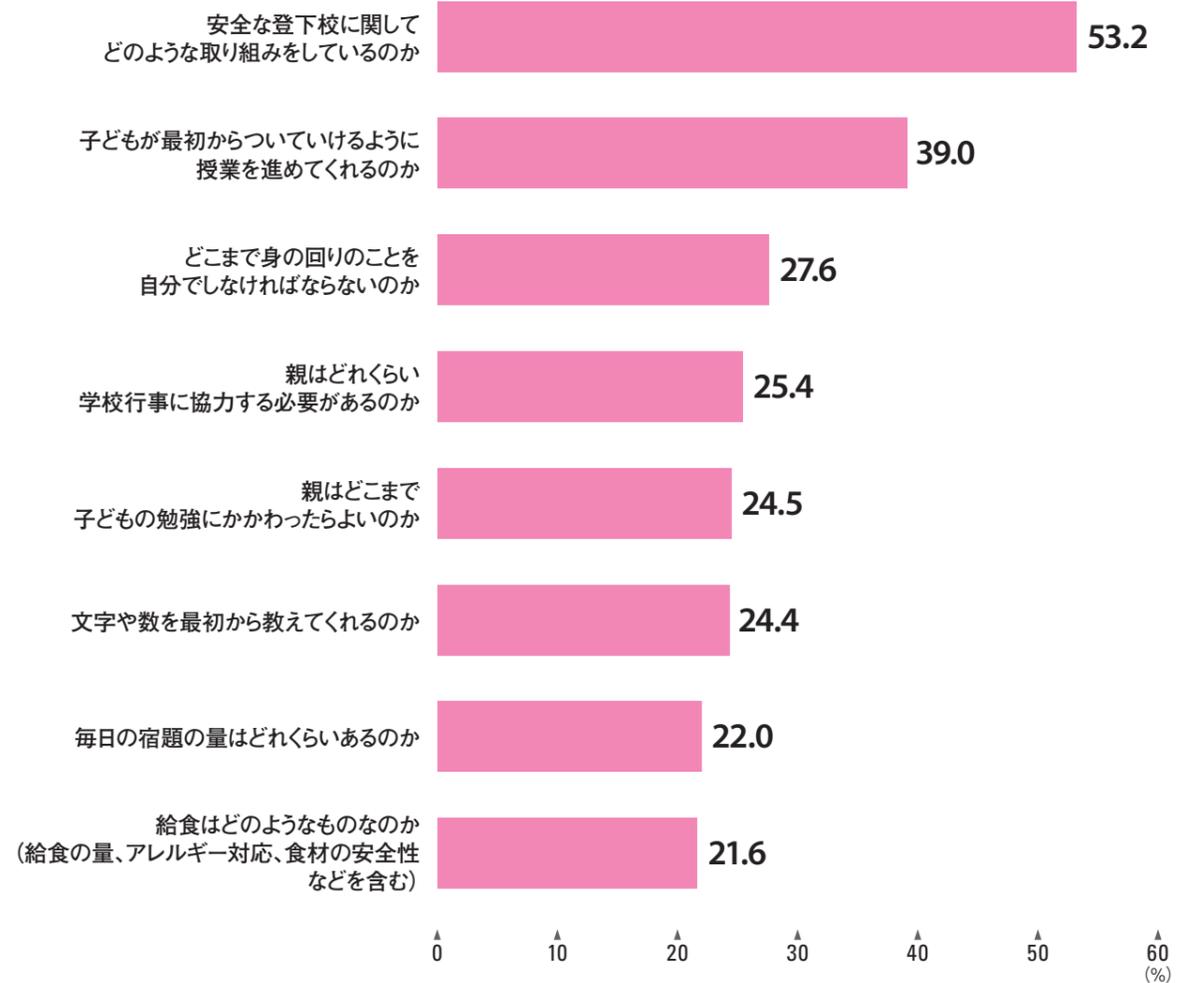


高岡純子研究員◎ベネッセ次世代育成研究所主任研究員。妊娠・出産や子育てなど就学前の家庭を対象とする調査研究に携わる。

年長児の母親の50%以上が小学校について知りたいことは「安全な登下校に関する取り組み」と回答

Q あなたは、お子さまがこれから通う予定の小学校に関して、以下のことについて、どれくらい知りたいと思いますか。

図2 小学校について知りたいこと (年長児)



※年長児をもつ母親1,125名の結果。「とても知りたいと思う」の数値。

★年長児をもつ母親に「小学校について知りたいこと」を聞いたところ、最も知りたいことは「安全な登下校に関する取り組み」でした。次いで、「子どもが最初からついていけるように授業を進めてくれるのか」や「どこまで身の回りのことを自分で

しなければならないのか」についての回答が多い結果となりました。園と小学校では子どもの生活や登下校の方法などが大きく変化するため、小学校の取り組みについての関心が高いようです。

研究員解説

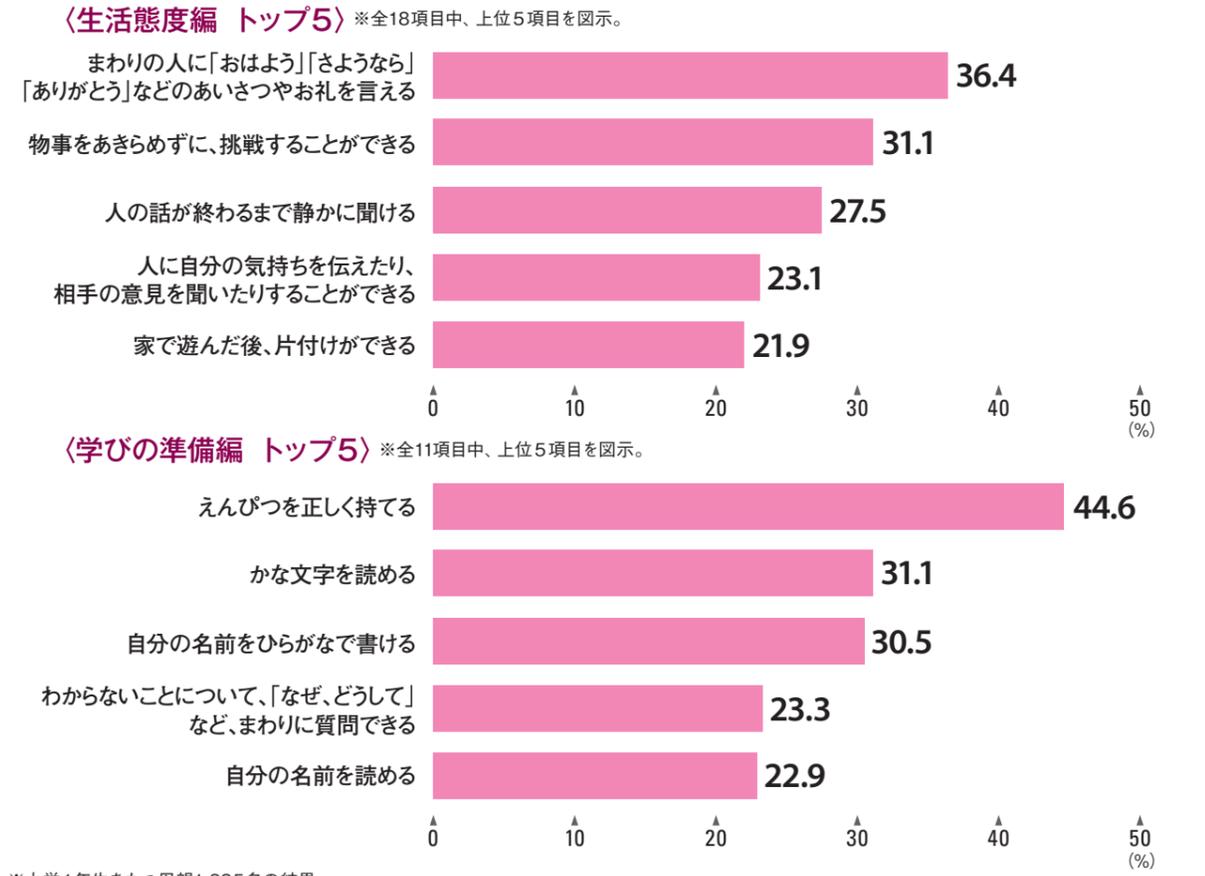
小学生になると送り迎えがなくなることもあり、安全に関して年長児の保護者の関心はおのずと高くなります。しかし、安全に関する不安は、実は入学後も消えるものではありません。子育てにおいて気がかりなことを母親に聞い

た別の調査では、小5・小6でも「犯罪や事故」が1位(2位は「整理整頓・片づけ」、中学生では2~3位と高くなっています(1位は「整理整頓・片づけ」あるいは「子どもの進路」)。学校生活に慣れても、安全に対する不安は変わらないようです。(高岡)

入学までに身につけておけばよかったと思うことは「鉛筆の正しい持ち方」と「あいさつやお礼」が多い

Q 今、振り返ってみると、お子さまが小学校に入学するまでに、身につけておいたほうがよかったと思うことを3つ選んでください。

図3 小学校入学までに身につけておいたほうがよかったと思うこと(3つ)



※小学1年生をもつ母親1,285名の結果。

★小学1年生の子どもをもつ保護者に、就学前の時期を振り返り、小学校入学までに身につけておいたほうがよかったと思うことを「生活態度」と「学びの準備」に分けて、答えてもらいました。ここでは、それぞれの上位5つを抜粋して紹介します。生活態度編では、「あいさつやお礼を言える」、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」「人の話が終わるまで静かに

聞ける」など園でも大事にしていることについて回答する人が多い傾向でした。学びの準備編では、最も高かったのが「えんぴつを正しく持てる」で44.6%でした。ひらがなの読みや書きよりも身につけておけばよかったと思う割合が高いということがわかりました。

研究員解説 あいさつやお礼は、年少の頃から保護者が重視しているしつけであることもこの調査から明らかになっています。保護者も早くから気にかけているけれど、子どもにとって難しく、なかなか身につかないものなのでしょう。「えんぴつ」「かな文字」に関しては、年少児から年長児にかけて「できている」と評価する保護者が増えているのに、小学校に入ってから振り返るとその割合はやや減少します。授業で鉛筆を使う機会が増えるため、保護者も気にかけるようになるのでしょう。(高岡)

出典：『幼児期から小学1年生の家庭教育調査』（2012）
 調査対象：年少児～小学1年生の子どもをもつ母親
 有効回答数：5,016名
 調査時期：2012年1～2月

調査地域：全国
 調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
 調査項目：子どもの生活時間／子どもの学習のレディネス／母親のかかわり／母親の教育観／園・小学校の満足度など

調査データを踏まえ、園ができる対応について考える

身につけたい「力」の本質をとらえて、子どもにかかわっていく



今回の調査では、卒園前後の子どもに対する保護者の思いが浮き彫りになりました。こうした母親の思いを、園はどのように受けとめ、日々の保育に取り組みばよいのでしょうか。ベネッセ次世代育成研究所の磯部頼子顧問がお話しします。

ベネッセ次世代育成研究所 顧問
磯部頼子
 いそべ・よりこ
 東京都足立区立大谷田幼稚園長、全国公立幼稚園長会会長などを歴任。現在、ベネッセ次世代育成研究所顧問として幼児教育研究に携わる。

に直していくことも必要になると思います。それにはまず保育者自身が正しく持っていることが大切です。園長先生はまず、自園の保育者自身が箸や鉛筆を正しく持っているかをチェックしてみたいはいかがでしょうか。

「できるようになる」ことの意味を考える

「読み聞かせ」のデータ（図1）から、保護者は子どもが文字を読めるようになると、「絵本は自分で読んでほしい」という思いをもつ傾向があるように感じました。

大人が読んであげることで、内容の理解を深めるだけでなく、言葉や文のもつリズムや読み手の気持ちが子どもの心に心地よく響き、次にひとりで読むときに、その心地よさが思い起こされます。このような保護者の読み聞かせの意味を、園から発信することが大切だと思います。

「入学までに身につけておけばよかったと思うこと」のデータ（図3）を見ると、鉛筆の正しい持ち方を身

につけてほしいと思っている保護者が多くなっています。入学後、我が子が苦勞している姿を目の当たりにした結果ではないでしょうか。ひらがなは「とめ、はらい、はね」などを重視しており、正しく鉛筆を持つことが求められるからです。

鉛筆の持ち方は乳児期のスプーンの持ち方から始まります。なかなかうまくいかない時はスプーンから試してみるのもいいでしょう。保護者の気持ちとしては持ち方よりも「しっかり食べてほしい」「少しでも多くの文字を覚えてほしい」という気持ちの方が強いこともあるでしょう。ですから、園ではお弁当や給食の時、保育者が一人ひとりに合わせて気長に援助したり、鉛筆を使う機会に一人ひとりの様子を見てこまめ

危険から身を守る力は多様な体験から養われる

今回の調査では、年長児の保護者が、「安全な登下校」について高い関心をもっていることがわかりました（図2）。では、園にはどのような取り組みが求められるのでしょうか。

子どもが危険を予測したり、回避したりする能力は、すぐに身につくものではありません。園や家庭で多様な活動を経験しながら、徐々に身につく力です。そして、保育者や保護者が、一人ひとりの子どもの行動特性を踏まえながら、子ども自身が自分の行動を抑制したり、コントロールしたりする場面を意図的につくることも必要です。そのようにして、子どもに「こんなときはどうすればよかったと思う？」と問いかけて、自分の行動を振り返る機会をつくり、判断の基準が身についていくようにしていくことが大切です。

大人の指示がなくても、子どもが自分の体験をもとに「やってはいけないこと」「気をつけること」を判断できるようになるといいですね。

